

序

著者	小長谷 有紀
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	115
ページ	1-2
発行年	2013-11-29
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008927

序

小長谷有紀

本書は、モンゴル国における宗教と農業の維持発展あるいは両者の関係についてさぐるために、現在も宗教および農業の両面で中心地となっているハラホリン地域において、地元生まれの人びとにインタビューしたテキストである。

編者がこれまで刊行してきたインタビュー集『モンゴル国における20世紀——社会主義を生きた人びとの証言』（国立民族学博物館調査報告（SER）41号/日本語，42号/モンゴル語）とその続編『モンゴル国における20世紀(2)——社会主義を闘った人びとの証言』（SER 71号/日本語，72号/モンゴル語）のさらなる続編である。これまでのインタビュー集と比べると、ハラホリンという地域的な特徴（locality）と、対象者が政治家ではなく、普通の人びとである（ordinary people）という特徴を有している。

ハラホリンは、13世紀に建設されたモンゴル帝国の首都カラコルムにちなんで命名された行政区域であり、社会主義時代には国営農場として発展してきた。また、モンゴル高原において、最初の仏教寺院が16世紀に建設されるなど、定住的な要素を伴う中心地として歴史的に継続して利用されてきた地域である。こうした地域的な特徴があるために、地元の人びとの語りには畢竟、社会主義時代における農業開発や宗教維持に関する言及が多い。あるいは言及を求めることができる。

自主的な回想であれ、質問による回答であれ、こうした語りは、社会主義時代、一般の人びとが日常生活の中でいかなる宗教実践を秘密裏におこなっていたか、元僧侶たちがどのように社会主義に対応したか、あるいはポスト社会主義時代に一般の人びとや元僧侶たちがどのように宗教復興に関わったか、といった点に関する具体的な証言として重要な資料となるだろう。

このインタビューは、2009年12月、モンゴル大学文化人類学部講師のジャーダムバルハグワテムチグさんの優れたヒアリング能力によって遂行された。録音状態が悪かったにもかかわらず、正確に復元してテキスト化するという労にあたったのは、ウランバートル在住のダシダワー・ムンフバットさんである。翻訳はその夫人である斎藤美代子さんをお願いした。日本学術振興会2009～2011年度科学研究費補助金、基盤研究（A）（一般）「世界遺産エルデニゾー僧院に関する総合的研究——過去の復元から未来への保存へ——」（代表：松川節）の成果の一部である。チベット仏教に関する用語については、当該科研の代表者である、大谷大学の松川節教授が校閲した。また、植物名については、岡山大学研究員のナチンションコルさんに確認をお願いした。インタビューに応じてくださった方がたをはじめとして、上記の方がたに深く感謝する。と同時に、全体の編集上の責任はあくまでも編者が負っていることをここに明記する次第である。

注記

原語であるモンゴル語のテキストでは、ごくわずかながら、文脈の不明瞭な箇所に（ ）を付して文章をおぎなつた。一方、日本語訳のテキストでは、読みすすめるうえであったほうがよいであろうと思われる訳注を（ ）内にくわえた。さらに日本人にとってわかりにくいであろうと思われる箇所には〔 〕で文をおぎなつた。こうした補筆の部分で若干の相違があるものの、基本的に逐語訳である。

他方、英語訳はモンゴル語から翻訳している。もっぱら意識であり、重複的な表現などを省略しているため、抄訳となっている。英語訳のテキストでは、語句に関する簡単な説明は本文中の（ ）内におさめ、より詳細な説明は注として文末にまとめてある。文末の説明は、コロンビア大学のモリス・ロッサビ特任教授が担当し、抄訳は夫人のメアリー・ロッサビさんが担当した。

3つの言語によるテキストは、以上のような異同がある。